

誌上シンポジウム

対人関係能力の低下と現代社会¹⁾

企画者：名古屋大学情報文化学部 長 田 雅 喜

現代の人びと、とりわけ若者は、群れ遊びをしないで育ってきたことや、きょうだいの中で揉まれて育ってきていないことなどによって、対人関係能力（社会的スキル）が著しく低下してきている。これから本格的な高度情報社会を迎えるが、そこでは生身の直接的な対人接触を経ないでコミュニケーションが可能であり、対人関係能力がいつそう低下していくことが考えられる。

対人関係能力の低下は、対人ストレスを増幅させ、直接的にはいじめの多発などの問題を引き起こす。また、他者との摩擦を回避しようとして深入りした関係を避けようとするため、人びとは孤独感に陥りやすくなるだけでなく、他者からの反応が得られなかったり、他者との比較ができなかったりで、自己像が揺らいであいまいになりやすい。自己像が揺らぐと、自分探しに走ったり、あるいは自分自身に確信がもてなくなって周りの人びとの動きに引きずられやすくなったりする。さらに、頼りない自分の心を守ろうとして、それが身体面での清潔志向となってあらわれるということも考えられるであろう。このように、人びとの対人関係能力の低下は、間接的には諸々の社会現象に反映することが考えられる。

本シンポジウムでは、現代におけるいじめの多発、孤独感の蔓延、自分探しブーム、流行の隆盛などを、「対人関係能力の低下」を切り口として掘り下げてみたい。さらに対人関係能力の向上への方途についても可能性を探ってみたい。

パネリストには、対人関係能力の低下にかかわる問題に大きな関心を寄せている気鋭の3名の方をお願いした。発言順に紹介すると、以下のとおりである。

まず、三島浩路氏（名古屋市立浦里小学校教諭）には、「対人関係能力の低下といじめ」と題して、主として教育現場からの問題点を報告していただく。三島氏は、教育現場におけるいじめの問題を中心に実践的研究に取り組み、かねてから小中学生のいじめに少なくとも2つのタイプがあるという論を展開しておられる。政令指定都市の中で、名古屋市はいじめの発生件数が多いといわれ、その背景等についても考察を期待したい。いじめは今や学校においてばかりでなく、リストラをきっかけに企業などにおいても多発しており、大きな社会問題になっているといえる。

また、諸井克英氏（静岡大学人文学部教授）には、「対人関係能力の低下と世相」と題して幅広く話題提供していただく。諸井氏は、ずっと孤独感の研究を行ってこられたが、最近では自己意識の問題にも大きな関心を寄せておられる。対人関係能力の低下は、対人関係の表層化を導き、自己像のあいまい化を招来し、それが現代の諸々の世相に反映していると考えられる。電子ペットの流行なども含めて幅広い話題提供を期待したい。

さらに、相川充氏（東京学芸大学教育学部助教授）には、「対人関係能力の向上への手立て」と題し

1) 本誌上シンポジウムは、1997年5月31日に行われた日本社会心理学会第41回公開シンポジウム（於名古屋大学）を元にしての。提案者には、当日の発言を核とした新たな提案論文の執筆を依頼した。指定討論者には、提案論文を読んだの討論論文執筆のお願いをした。企画の全面的な掲載を快諾して下さった情報文化学部教授長田雅喜先生に感謝いたします。（文責 吉田俊和）

対人関係能力の低下と現代社会

て提言していただく。相川氏は、返報性や社会的スキルについて研究されておられる。従来の社会的スキルの研究は、スキルが非常に劣った個人の訓練に焦点が当てられていた。社会のだれもが対人関係能力が低下していく中で、その向上への適切な手立はあるのかどうか、あるとすればどのような方法があるのだろうか。

指定討論者としては、発達心理学の分野から二宮克美氏（愛知学院大学教養部教授）、社会心理学の分野から吉田俊和氏（名古屋大学教育学部教授）をお願いした。